

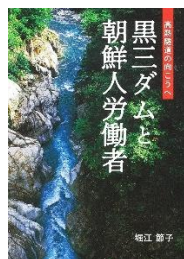
宇奈月トロッコ電車に乗りました —真相究明ネット、黒部・宇奈月フィールドワーク—

『むくげ通信』319号 (2023.7.30)
飛田雄一

7月16日(日)朝8時半、JR富山駅に集合した。31名、強制動員真相究明ネットワークのフィールドワークだ。2019年に企画されたがコロナのために延期になっていたものだ。

まずは、市内の「不二越」をバスの中から見学。アジア・太平洋戦争の時期に朝鮮から多くの女性を連れてきて労働させたところだ。朝鮮人関連としては、珍しく一部分だが裁判での「和解」が成立した。(その後、日本政府はちゃちゃを入れた)

バスの中で、中川美由紀さんから不二越裁判のこと、今年2月に韓国を訪問して遺族に現状を報告したことなど。中川さんは、竹内康人さん、堀江節子さんと『富山県・朝鮮人強制労働—黒部川発電工事・不二越訴訟・富山県強制連行』(コリア・プロジェクト@富山、2022.11、500円)を出された。小冊子ながら内容の充実したものだ。



松浦晴芳さんからは、富山県歴史教育者協議会発行の『平和と人権とやまガイド(増補改訂版)』(2023.7、500円)の紹介があった。地域の取り組みとして見事なものだ。

堀江さんからは黒部ダムと朝鮮人についての説明があった。堀江さんは、1992年に、此川純子さん、内田すえのさんと『黒部・底方の声—黒三ダムと朝鮮人』(桂書房)をだしている。むくげ通信でも鹿嶋節子さんと飛田が紹介している(136号、299号)。

関西電力編集のビデオの上映もあった。関電製作で朝鮮人労働隠蔽の問題があるが、黒部ダム建設の様子がよくわかる迫力あるものだ。黒部に向かうバスのなかでみたのでなおさらだ。堀江さんは、つい最近『黒三ダムと朝鮮人労働者—高熱隧道の向こうへ』をだされた(桂書房)。先の『底方の声』以降の新たな研究成果もとりのれた本だ。9月19日には、むくげの会のZOOMゲストディでお話をうかがう予定だ。(参加希望者は、hida@ksyc.jpまで)



宇奈月方面の最初の訪問地は、1936年に建設された愛本発電所。これからフィールドワークでさかの

ぼっていく黒部川の下流部にあるもので、現在も使われている。朝鮮人強制連行前史のダム工事の現場として訪問し、当時の労働状態について竹内康人さんから話を聞いた。



富山市内の不二越の正面玄関／愛本ダム



2番目の訪問地は、「呂野用墓」。内山駅近くの林の中にある。墓石に「昭和12年10月9日」と刻まれている。この墓付近にあった寺の住職らがつくったものだ。近年追悼行事が行われるようになった。堀江節子さんから説明を聞いた。(堀江『黒三ダムと朝鮮人労働者』63～65頁)

第3番目は薬師寺の墓地にある「萬霊之塔」。宇奈月にだいぶ近い。ダム工事等で亡くなった労働者(無縁者)を追悼するために1987年に建てられたものだ。



呂野用墓／萬霊之塔



そして、宇奈月温泉に入った。基本的なフィールドワークはここまで。そのままバスに乗って富山に引き返す人、宇奈月温泉を散策する人、そして、更にトロッコ列車で樺平まで行く人に分かれた。連休でトロッコ列車の予約は必須とのことで私は予約していた。結局、当日、やはり樺平まで行きたい人もチケットを購入できたようだ。

私は、宇奈月はたしか3回目だ。最初は、1993年、在日朝鮮人史運動史研究会の関西部会と関東部会の、初めての合同合宿だった。合宿でどんな発表があったのか、懇親会がどんな感じだったのか、何名が参加したのか、私はまったく覚えていない。

でも合宿終了後に、トロッコの終点・樺平から祖母谷温泉にいったことは覚えている。朴慶植さんと

崔碩義さん、そして私が宇奈月に誘った神戸大学留学生・鄭燦珪さん 4 名だ。そこには河原に大きなプールのような露天風呂があった。熱いと思ったら、川の水をホースでひっぱってきて温度を下げるのだ。

夜中に朴慶植さん、腰が痛いと大声をだした。みんなびっくりした。見ると背骨の一部が飛び出している。医者と呼ぶこともできない。その骨らしいものを私はすこしさわった。朴さんはまた、飛び上がるように大声をだした。

しばらくすると、朴さんも落ち着いてきた。もう一度、その部分をみたらその骨が、もとに戻っている。私の「治療」が功を奏したのか？

以前、学生センターで操体法の教室を開いていた時のこと。先生が、こんなことを言っていた。

「人間は痛いと感じるとき自然にそれを避けるように体を動かせる。その動きが体を自然な状態にもどすことがある」。ふむ、そうだったのかもしれない。

翌日、朴慶植さんと崔碩義さんは宇奈月にもどった。私と鄭燦珪さんは、早朝に起き白馬岳に登った。このコースはかなりハードなコースで、今ならとても登れないと思う。

2 度目の宇奈月は、これも登山がらみで、1993 年。立山、剣沢から千人池経由で阿曽原に下ったのだ。これもハードなコースだが、私は、剣沢から千人池への急な登りを元気げんきに鼻歌交じりで登っていた（そうだ）。阿曽原から樺平へは水平歩道を歩いた。なつかしい。

今回フィールドワークで乗ったトロッコ列車は、黒部ダムの歴史を勉強したのちだったので、景色も違って見えた？！



宇奈月薬師寺の「供養塔」／トロッコ電車より



樺平では自由時間があった。水平歩道まで登ってみようかと思ったが、あまりにも急そうなのでやめた。祖母谷への道を少しいって引き返した。歩きやすい道で正解だった。

黒部といえば小学校のとき「黒部の太陽」を見た。小学校（湊山）の映画鑑賞会が新開地衆楽館であったときだろうか。川に落ちそうになりながら資材を運ぶ姿、ダイナマイトで爆破しながら掘り進む姿を

覚えている。

この黒部ダムは「第 4」、なのでクロヨンといわれている。第 4 があるということは、第 1～3 がある。堀江さんが描いているダムは第 3、書名も『黒三ダムと朝鮮人労働者』だ。

私は以前、ダム発電というのは、ダムの上から水を落としてダムの中にあるタービン＝発電機を回して発電するものと思っていた。そういう方式もあるが、多くのダム発電所はそうではない。ダムでためた水を、高度を保ちながら送水管で下流に流し、そこで一気に水を落として発電するのである。ダム・送水管・発電所があるのだ。第 3 発電所はトロッコ列車の終点の樺平にあり、第 3 ダムはその上流にある。これら送水管（隧道）の工事難工事の連続で多くの朝鮮人労働者が働いた。ドキュメンタリーとして有名な吉村昭『高熱隧道』は、黒三ダム建設のための資材運搬トンネルとして作られたものだ。堀江さんは著書で、『高熱隧道』が朝鮮人労働者のことに触れないだけでなく現場監督の苦労話を中心としたもので、労働者の視点がないことを指摘している。

仙人谷は、雪崩（「ホウ」といわれる）がよく発生したところで、その工事現場でも多くの犠牲者がでた。その下流（北）の阿曽原に登山で寄ったことは書いた。その阿曽原小屋、『山と溪谷』7 月号を読むと、雪崩のため毎年秋に解体して、春にまた組み立てるという。4 か月の営業のために毎年その作業をしているというから驚く。

樺平でおのおの過ごしたのち、またトロッコ列車で宇奈月に戻った。トロッコのアナウンスで、「このトンネルを出たらすぐ右側が撮影スポットです」というのがあった。が、その時、スマホのバッテリーがあがっていた。写せなかった。



宇奈月の温泉噴水、ほんとう熱かった／富山市内で食べた深海魚（手前）、名前はわすれたが美味しかった



富山電鉄で富山に。最後に精鋭？ 6 人が居酒屋で総括会を開いた。充実したフィールドワークだった。（前日、15 日には、富山市内に不二越関連施設を訪ねるフィールドワークがあり 20 名が参加した。私は別の用事があり参加できなかった。）